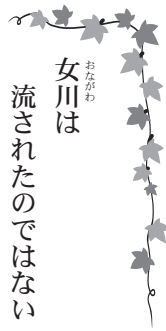


復興制度が被災地の求める現状と一致しないことから、災害後に最も必要となる国や地方の法整備の充実を訴えていました。

これら県外視察研修の成果を南海トラフ地震への備えに活かすことが議会の最も大切な役割となります。

東日本大震災から3年、多くの課題を抱えながらも希望・復興のつち音があちらこちらで、左の詩のように人々の心の中にも響きはじめています。



おなわ
女川は

流されたのではない

新しい女川に生まれ

変わるんだ

人々は負けずに

待ち続ける

新しい女川に住む

喜びを感じるために

女川町・当時小学6年

現在中学3年

佐藤 柚希



産業建設常任委員長

さかもと

坂本 あや

再び気仙沼へ

3年前に訪れた気仙沼の状況と比べると湾の真正面に当たる多くの加工場が並ぶ町並みは一変されていました。瓦礫や車、大きな船まで、陸に打ち上げられていた当時に比べれば瓦礫と化した住家や工場会社、店舗、そのほとんどが撤去され、広い土地が広がっているだけの風景でした。殆んど再建された建物は見えない状況で、3年の間に復興していたのかといわれると、まだまだ手付かずの状況のように見えました。今回こうしてまた、気仙沼市を訪れることで黒潮町議会は、津波に呑まれる前の街や、被災直後の様子、そして3年が経過した今を目撃することになりました。

先の視察では、地元の方々の心情を考えて、現状を見せたいただけだけのスケジュールで視察をさせていただきましたが、今回は気仙沼漁協にもお邪魔し組合長さんをはじめ職員さんの話を聞くことができました。

漁協は津波で屋上を残して波に飲まれていたところですが、多くの人たちが屋上に避難し難を逃れたところで、建物にはここまで波が来たという印がつけられていました。

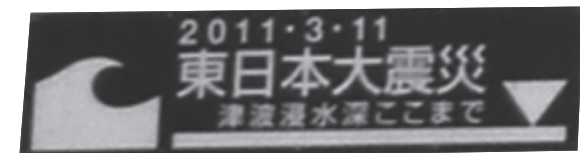
また、漁協も土地が沈下しており、潮の干満によって市場に波が入ることによって、その改修も行われていました。私たちが先に視察した時には、亀裂の入ったその場所でもマグロの出荷がすでに行われており、驚いたことでしたが、

被災した直後、漁協関係者の方々が集まり、これからどうするかの話し合いが行われたと組合長さんたちから説明がありました。

漁師さんも関係業者も多く

がそれぞれに被災している状況下でも組合は、できることから出来る者が漁や仕事を少しでも始めてほしいとの声掛けをしたそうです。だから、私たちが見た被災直後の出荷作業は、その結果だったのかと想像ができました。

また、今回は先の視察では地震が発生し避難をしなければならなかったため視察できなかった陸前高田市にも足を運びました。ここでも、高台



2階まで浸水した気仙沼市魚市場、幸い骨組みが残ったので復旧が比較的に早かったとのこと

移動の用地作りで出た土で町の地盤をかき上げするという壮大な事業が行われていました。巨大なベルトコンベヤーが町の中に張りめぐらされており、ダンプが次々に土を運んでいました。日本の風景だろうかと思うくらいのこの作業はこれから4、5年繰り返されて行くといえます。女川、南三陸、東松島と同じように事業が行われていましたが、地域の皆さんが家を建て、生活を再建して行く日はまだしばらくかかってしまうのだから、復興の難しさを感じた視察となりました。